

「自己研修型教師」を育てる研修会のあり方に関する研究

—持続可能な研修を探る—

坂本南美 棟安都代子 神原克典 安川佳子 助言者：吉田達弘

1 研究目的

本研究は、兵庫教育大学大学院修了生である英語教員たちが「自己研修型教師」としての成長はどうか実現していけるのかという問いを考える。2年の研究期間のうち1年目は、毎月行われる研修会と並行して、インターネット上での参加者によるリフレクションを共有した彼らのやり取りを質的に分析した。そこでは、**I 教師による理論と実践との対話**が実現し、教師たちによる理論を通じた実践の再概念化が行われていた。本年度は、この「自己研修型教師」を育てるための研修会の枠組みをより明確にし、「自己研修型教師」を「自らの授業実践についてのリフレクションから学び、葛藤しながらも仲間と協働的に成長しようとする教師」と定義しながら、自己研修型教師として成長するための学び、及び、そのような研修の場がどのようなものであったかを明らかにする。

2. Inquiry-based approaches

Johnson(2009)は、教師たちの中で Inquiry-based approaches が機能するためには二つの要素 — ①教師たちがお互いに水平な関係でそのグループの活動に参加できる構造、②教師たちが一人でできる以上のことを得ていくための援助やサポートが受けられる社会的状況を意図的に創造すること — が必要だと述べた。そこで、前年度の研修会の形態の中でもこれら二つの要素を基盤とした枠組みの中、そこで見られた教師の成長を支える要素を探った。研修会は、2012年4月～2014年3月まで実施しており、現在も継続中である。参加者は、兵庫県在住の大学院修了生4名（中学校英語教員2名、高校英語教員1名、大学英語講師1名）と助言者の兵庫教育大学教員1名である。月に一度の半日の研修会と並行して、インターネットのウェブ上に、参加者のリフレクションをアップロードし、互いにコメントのやり取りをする場を設けた。研修会では、参加者たちが、毎回、英語教育に関わる文献を輪読し、その内容について自らの実践と照らし合わせたり、理論についての理解を互いに深め（ていっ）たりしてきた。本年度は、月例研修会の場やウェブ上での参加者たちによるディスカッションに焦点をあて、それぞれのやり取りをテキスト化し、質的に内容の分析を行った。

3. 自己研修型教師の成長

(1) 対話的援助

2012年12月のグループディスカッションでは、中学校教諭Aは、ジャーナルを書く

だけでは自分の授業における葛藤や困難を打破できないもどかしさについて語っている。

- A どんなに考えて書いても、僕が書いている時は、僕は、僕のカラーの中でしか書けないんですよね。(中略) ぐるぐる回っているところから抜け出せないところがある。それをこうやってせっかくみんなが集まった時に、違う人に全然違う視点から言ってもらったりね。まったく別のものの見方とか、はっとなるのはいいことだと思う。いい意味で自分が考えていることを、「がしゃーん！」と崩されるような発言もきつとあるかもしれないですよね。でも、そこが「あ、ほんまや」というのにつながっていくと思うし、研修力と言うか「気づき力」と言うか、成長するかもしれない。 [2012年12月2日]

Aは、自らの授業実践において生起する葛藤や迷いが自分一人の力では解決できないと感じる中、「違う人に、ぜんぜん違う視点から言ってもらったり」することで、「はっとなる」体験ができ、今まで意識になかった現象を可視化したいと願っている。そして、「いい意味で、自分が考えていることを、がしゃーん！」と崩されるような経験を持ち、教師たちが互いの経験や知恵を共有する空間を持つことで、新たな視点による「気づき力」が養われると期待している。また、同じ日に次のような対話もなされた。

- A 「矛盾しますが、(自分の) 言っていることを共感してもらいたいというところもあるし、そこを崩してもらいたいという願望もあります。」
- B 「確かに崩してもらいたいってありますよね。自分で崩すと自己否定というか、うまくいかなかったということがズシンと入ってくる。崩されるのも少し怖いけど。」
- A 「聞き手と書き手、話し手の関係もあるからその関係によって言う内容も変わるとか。」
- C 「大きいですよね。(相手との関係によって) どこまで自分の本音をそのまま出すかっていうのも変わってきますよね。」
- A 「さわやかに気持ちよく崩されたいですね。」
- B 「そこ大事ですよね。」
- A 「急に先輩にね、涙ながらに崩されるんじゃないくて。」
- B 「よしやるぞ！という気持ちを残して気持ちよくさわやかに崩されたいですね。」

ここでは、メンバーたちが今の自分の殻を破って成長していきたいという願望について語っている。彼らの語りから「(自分の) 言っていることを共感してもらいたい」反面、「崩してもらいたい」という期待感も混在していることが分かる。しかし、やはり自己の実践を否定されることは「少し怖い」こととして再認識されている。ところが、その怖さは「聞き手と書き手、話し手の関係」によっては、軽減できるものだと捉えられる。つまり、崩す側と崩される側に、本音を出して語り合っていける関係性があるかどうかにかかってい

るのだ。このあとに、「さわやかに気持ち良く崩されたい」という、キーワードが語られており、「よしやるぞ！という気持ちを残して」気持ちよくさわやかに崩されることで、崩される怖さを超えるほどの価値、教師としての学びを促してくれる価値があると捉えているといえる。この自己研修会は、メンバーが互いに尊敬し合い、誠実に、共感を持って語り合っていることが前提となっており、このような関係の中でお互いが実践経験について言語化し、そこに問いを投げかけたり、探ってみたり、解釈したり、批判的になったり、と様々なやりとりを行っている。こういった前提のもと、ディスカッションを行うことで、メンバーたちが、自らの実践で見えなかった部分を発見し、曖昧としていた部分が明瞭になり、互いの成長を助けることにつながっていたといえるだろう。

(2) 途切れることのない対話

メンバーの B は、2012 年 12 月 9 日、自らの授業実践についてアップロードした。彼女の学校は中高一貫校で、3 年生 10 月から高校の内容を取り入れて授業を展開する。

<B によるジャーナル>

It was my first time to have the class with using high school textbook, and now I can understand that I was more nervous to prepare the lessons than now. I didn't or couldn't think enough about the students' anxiety at the same time last year. Yes, the students last year had a different atmosphere, but I think my viewing points were much focused on how to handle high school textbooks. For example, how to teach and explain new grammatical points and also how to go into topics deeply, in the 50 minutes. When I thought of designing or organizing the classes, I was very nervous about my style of teaching grammar. [2011 年 12 月 9 日]

中学校教員経験の長いメンバー B は、この中学校に転勤して 3 年生を担当し、初めて高校の教科書を使った内容や文法を教えるにあたり、「これまでコミュニケーションなスタイルだった授業が講義形式になり、教師本人も生徒自身も不安を感じていた」「授業は自分が作った筋道 (track) 通りに進めなければならないと思っていた」と自己分析を行いながら綴っている。そこへ別のメンバーであり助言者の C からのコメントが入り、何度かやり取りがなされ、大学院時代に「以前 *grammaring* という話をしたことがあり」「Dian Larsen-Freeman が *Grammaring* の本が出たこと」「文法の 3 様相について意識するようになった経緯」への振り返りが促されて、話題が広がっていった。

<C によるコメント>

That's a good way of presenting the usage of grammar. By the way, have you read Dian Larsen-Freeman's "Grammaring" book? It's a good book especially if you are interested in the aspect of "use" of language and how you combine form, meaning and use. [2011 年 12 月 25 日]

<Bによるコメント>

These days I feel that such kind of chances in a classroom are very important to deepen students' grammatical knowledge and re-understand the grammar points carefully. I think, before, I hesitated to have this kind of discussions with ALT in the classroom. Maybe it was because I thought that teachers need to prepare everything "perfectly", including teaching plans, teaching materials, grammar explanations, time management, and more. Maybe I didn't want to make my lessons out of track. But we make tracks in the class. In reflecting them, I was too nervous of them and couldn't see and understand our interaction carefully in the classroom. Now I feel free to have such discussions when it is needed, and to stop the flow of the tempo of the lessons when students need to make sure their understanding. [2012年1月2日]

ウェブ上での対話をきっかけに、最初にリフレクションを書いたメンバーは「自分の書いたシナリオ通りに授業をするのではなく、ALTと文法の意味合いを生徒の前でディスカッションするようになったこと」「このディスカッションも生徒が文法を理解することに役立つのではないか」と次の自分の授業スタイルへの見方が変わる手がかりとなっていったことを示唆する記述をしている。文法について言及すると、特に「活用」という点で生徒に実際挑戦させようという気持ちになっていることが伺える。このように、研修会を終えて自分の授業をふり返り、他者との対話を通して、試行錯誤している自分の実践を再度分析しながら、軌道修正したり自信を持ちなおしたりというように、自己内対話によって、新たな気づきの可能性を広げ、他者との対話と自己への対話が途切れることのないものとして展開されている。

4. まとめ

この研修会のスタイルは Johnson(2009)が述べる「教師自身の教育実践や生徒たちの学習を同時進行で、より詳細に、組織的に、反省的に吟味できるような媒介スペース (mediational space)」のもと、参加者たちは研修会において文献を再度読み合わせながら、日頃の教育実践の中で抱えている問題を出し合ったり、個人の教育活動の中で、あらためて文献で出会った理論とのつながりを意識したりしている。またウェブ上でもリフレクションをあげ、コメントを書き合い、対話を共有しあった。このウェブ上でのつながりが時間と空間を埋めながら途切れることのない対話を創り出していた。2年の研修会実践を経て、教師たちの間に、Ⅰ理論と実践のとの対話、Ⅱ対話的援助、Ⅲ途切れることのない対話が生起したことが明らかになった。今後、英語教員の研修会として、さらに教師の成長を助けるこの研修会をより多くの人数で展開できるよう模索したい。

<参考文献>

Johnson, K.E. (2009). *Second Language Teacher Education: A Sociocultural Perspective*. New York:Routledge.